
初恋スピリッツ 翔太side

零雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初恋スピリッツ 翔太side

【Nコード】

N4163G

【作者名】

零雅

【あらすじ】

初の翔太目線！！翔太のドキドキでちょっと切ない物語をどうぞ

カーテン・オープン くヤキモチ??

俺の名前は、「奈津木 翔太」

突然だが今、俺には彼女が居る。

告白して両思いだと知った時は、メチャクチャ嬉しかった。

俺達は同じ部活のメンバーでテニス部に入っている。

はっきり言って俺は、その彼女に一目ぼれだった。

一目見て可愛いと思った。

それまで女子に興味がなかった俺は、かなりの慌てようだった。

話しかけられてもまともに話せないしケンカ売ってばっかだし。

いわゆる「好きな女子に意地悪しちゃうタイプ」?

って…俺は、小学生か!

こんな俺があいつと付き合ってるなんて今でも若干夢見心地。

あいつモテるし。

強気なのにたまに可愛いし。

彼女の名前は「 智夏」

これは、あせらせられっぱなしな俺と彼女の話。

「翔太っ！！」

智夏がスカートをはくがえして俺の元にやってくる。

朝の登校時間。

俺達は、毎朝公園の前で待ち合わせをしている。

だいたい時間より早く来る俺と遅れてくる智夏。

あいつが時間どつりにくるのは、週に一回程度だ。

「遅いぞっ！！」

「ごめんごめん」

智夏が息を切らしながら謝る。

そんな姿もなんとなく愛くるしい。

「それじゃ、行こっか！」

俺達は、歩き出した。

…手も繋がずに。

実の所、智夏は滅多に手を繋がせてくれない。

「恥ずかしいでしょ!!」

毎回この言葉で交わされる。

ちよつと試に繋いで見るか？

隣でなにやら話していた智夏の手をとる。

「ちよ、ちよつと翔太っ!!」

顔をカーツと赤くさせて手を離す。

はつきり言っ…へこむ。

彼女に手を振り払われる彼氏なんて聞いたことねえーよ!!

俺としては、メチャクチャ繋ぎたいのに。

毎日の登下校、俺はこんな深刻な問題に直面している。

でも、俺には最近もつと深刻な悩みがある。

それは…

「御蔵!!」

夏に転校してきたこのクラスダントツの爽やかイケメン「東岸 大河」だ。

こいつが俺の人生最大の（今の所は）悩み。

はっきりいってこの二人。

メチャクチャお似合い。

そのせいでため息は尽きないし若干智夏との会話も少ない。

ちなみに大河は、俺達が付き合ってることも知ってる。

そして極めつけは、智夏自信が大河に好かれている事に気づいてないこと。

まるっきり友達気分。

でも、友達からカップルって事も結構ありえるだろ？

だから怖い。

まあ、もうさすがに慣れたからある程度の話題じゃ動じないんだけど。

「どしたの？大河？」

「今日一緒に学食行かねえ？」

… 前言撤回。

今の言葉、すげー顔が引きつりました。

というよりこの話題には！！

だって毎日、俺達は二人で学食言ってるんだぞ！？

最近では、唯一の学校での二人っきりの時間なんだぞ！？

「そっか！まだ大河は、学食言ったことないんだっけ？」

そっかじゃねーよ！！

「そーなんだっ。だから今日だけでも一緒に行ってくれねえ？」

マジで行くのかよっ？

俺の心中は穏やかじゃない。

智夏がちよっと迷った仕草を見せる。

そして次の一言で俺は、固まった。

「ん〜、それじゃあ今日だけだよ？」

「よっしゃっ！〜！」

思考停止。現在フリーズ状態。

………つつふざけんなあああああああ！

声には、何とか出さなかった物の俺が次の時間の授業を一人サボったのは言うまでもない。

ケンカ。

智夏が大河と学食行くといってから俺は

はっきり言っすねてる。

今は子どもっぽいとか関係ない。

マジでへこむ。

本当にへこむ。

たぶんこれは人生最大。

ていうか今までそんなにへこむことってなかった。

だから今回はそうとう答えた。

屋上の風が心地よい。

四時間目をサボって今は昼休みに入る直前。

…ぼーっといろいろのことを考える。

だいたい出てくるのは智夏の事。

…情けねえ…。

こんな自分にもイラついてくる。

その時。

「翔太っ！！」

声の主は智夏だった。

「やっぱりここに居たんだ」

ニツコリと微笑む。

…やべえ、可愛い。

「あのさ…今日大河と学食行っても良い？」

やっぱりそのことか。

がっくりと肩を落とす。

ちょっとやりすぎかってくらい。

「…行ってくれば」

「え？」

「行ってくればいいだろ？別に」

口調が冷たくなる。

…こんなこといいたいんじゃないーのに。

もっと良いことあるのに。

口が勝手に動いてゆく。

「…俺には関係ねーし」

…何言ってるんだよ、俺…。

「…ホントに良いの？」

「ああ」

智夏のちよつと悲しそうな顔。

しかし、返事はそっけなくなる。

「あたしは…翔太と食べたいんだけどな…」

「え？」

俺の疑問を解決することなく智夏は屋上を出て行った。

妙にイラつく。

智夏にじゃない。

良いたいことが言えない自分自身に。

「…んだよ…何なんだよ…」

走れっ！！

ぼーっと空を見上げる。

本当に青い。

まるであいつと付きあった時と同じくらい。

空が青い。

ああー…、このまま俺も空に溶け込んじまいたい…。

ちよつと本気で考えただけあつてその後少し笑えた。

時間さえも分からなくなって来たぐらいだ。

その時だった。

「奈津木っ！！」

誰かが久しぶりに屋上の扉を開けた。

「智夏がっ…！！智夏が大変なのっ！！」

俺を呼んだのは智夏の親友だった。

いつもは、もっと女子高生っぽい感じをもらにだして居るのだが

今はその様子はまったくない。

てゆーか智夏が大変って…!?

「あたし見ちゃったのっ…!!」

智夏が大河と一緒に体育館に入っていく所!!」

「はあ？」

体育館？そこまであせるような場所じゃないだろ？

別に大河はバスケット部入るって言ってたし…。

「知らないの!？」

今日は昼練ないから体育館入ったら二人つきりなんだよ!?

おまけに屋上はあ入れないようになってたから体育館に不良とか増えてるし…。

特に智夏。自覚ないから危ないんじゃない？」

落ち着いた口調で語る。

数秒で俺は色々なことを考えた。

俺の学校にももちろん居る不良のこと。

今日は昼練がないって事。

テニス部にも何人が不良グループが居ること。

そいつらに俺が何故か恨まれてること…。

やべえ…!!

大河がいるから大丈夫だろうけど…。

俺は体育館へと走り出した。

きつと体育館に着くまでこの足は止まらない。

一刻も早くあいつの姿が見たい。

出来れば…抱きしめたい。

良いたいこと全部言ってあいつと仲直りしたい…。

待ってる…智夏!!

告白。

吹き抜けの中央廊下。

部活で走ることは多いけどこんなに全力で走ったのは久しぶりだった。

体育館は屋上から一番遠い居場所。

…なんであんな所にいたんだ、俺！

不良の中で一番危ないのは俺と同じ部のテニス部員。

特に先輩。

俺は昔からテニスやってて二年のときからレギュラーだったし

なにより智夏はモテる。

だから危ない。

影で智夏を狙ってる奴なんて大勢いる。

大河がいるからその辺はある程度なら大丈夫だと思うけど…。

てか、はっきり言って大河も危ない。

体育館で二人つきりっておい！

絶対告るだろう。

悪い考えはどんどん広がっていく。

…急がねえと…!

「智夏っ…!」

体育館に着くなり俺は智夏の名前を叫ぶ。

どうやらフロアにはいないみたいだ。

奥に入って倉庫の扉に手をかける。

がらつと音をたてた扉のすぐ側に智夏はいた。

…大河と一緒に。

「翔太!」

二人とも突然入ってきた俺に目を向ける。

心なしか…頬が赤い。

これは…一番まずいシーンに入ってきたのか…？

「えっと…、お取り込み中？」

「お取り込み中」

それとなく聞いてみた俺の質問に即答する大河。

「俺、まだ智夏に返事聞いてないんだけど？」

ああ…やっぱりでしたか…。

てか俺、もしかして修羅場？

「で、良い？それともダメ？」

「んん………」

迷ってる様子の智夏。

告白の返事…。

大河に良いって言ったら俺達は分かれる…ってことだよな？

なんとなく人事のようになる。

あまりの展開についていけない。

そして、智夏が口を開く。

「んん〜、しょうがないな。良いよ付き合っただげる」

「!?!マジで!?!?よっしやっ!?!」

智夏の返事…。

つまり…この二人は付き合っつて事か？

じゃあ俺は？

これを見せ付けられたらわざわざ「別れよう」「なんていう必要ねえんだろーけど。

俺を見てわずかに微笑む智夏。

派手に喜ぶ大河。

何も出来ずにただ足っているだけの場違いな俺。

…俺、もうここにいる意味…ねえよな。

クルッと二人に背を向ける。

そしてそのまま…。

…ひたすら扉に向かってダツシユ。

ああ〜…ダセエ。

「翔太っ!?!」

後で智夏の声が聞こえるけどそんなもの今の俺には関係ない。

多少の名残惜しさはあるけど

ここで振り向くほど俺は往生際は悪くない。

それに…例えフラれたとしてもこんなダセエ俺、智夏に見せたくない。

今の俺はただそれだけだった。

帰り道。

猛ダッシュしたあと来たのは、

…やっぱり屋上だった。

できれば、来たくないような気もしたけど

俺にはここしかなかった。

まあ、さっきみたいにもう智夏が来る心配することもないし

一番安全かもな、ここは…。

その後の俺はずっと上の空だった。

今日のこの後の授業はたまたま自習だったし

先生に目を付けられる心配はなかった。

そして俺は、いつの間にか眠ってしまっていた。

「んん…」

目が覚めるとあたりはもう夕日のオレンジ色でいっぱいだった。

部活をやっている奴もそろそろ終盤という所だ。

とっさにテニスコートに目を移す。

これまた今日は顧問が出張の為、

男子テニス部は休養。

でも、女子テニス部は活動中。

その中に智夏の姿は…ない。

もしかしてなにかあったとか…？

いや、もう俺の心配することじゃないけど。

もしかしたら大河と一緒に帰ったのかもしれない。

でも、それならよかった。

あいつ等と一緒にいるところなんて

絶対に見たらまた落ち込むし。

なんて考えてたのもつかの間。

「あれは…」

それは校門の前。

智夏が一人立っていた。

まだ、帰ってなかったのか…。

前の俺達は毎日登下校だけは一緒だった。

もしかして俺を待ってる…とか？

しかし、そんな甘い考えは一瞬にして吹き飛んだ。

あれは…大河だ。

大河が智夏のもとに走っていく。

そこで二人でなにやら話している。

後ろ向きになってしまった智夏表情が見えない。

大河の表情はいたって楽しそうだ。

…そりゃそうだよな。

出来立てのカップルだ。

楽しそうにきまってる。

それから数分後。

二人は校門を出て帰っていく。

それは大河の家とは違う方向。

…紛れもなく智夏の家の方角だった。

別れを告げに。

次の日。

まあ、当然俺のテンションはもちろん最悪なわけで。

これまででなくくらいブルーなわけで。

一回は休むことを考えたわけで。

…でも、そんなブチ・大それた事を俺が出来るはずもなく。

部活の朝練もあるし。

しかたなく早起きして

取りあえずは登校した俺。

それに今日は女子テニス部は朝練がない日。

ブルーな気分を吹き飛ばすのには最適だった。

パコーン… スコーン…

テニスボールのおなじみの音。

…もう俺にはテニスだけだ…。

こういつこと言う柄じゃないけど今はこんなことを言えるほどマジ。

とりあえず朝練が終わったらいつらと逢わなくちゃ行けないわけだし

それまでにはテンション上げとかなきゃさすがにまずいよなあ。

テニスのボールと頭の中にあるもやもやについてのみ集中する。

…つもりだったんだけど。

「翔太っ！！！」

後ろから聞こえてきた聞きなれた声。

そして、

今最も聞きたくなかった声。

なくなりかけてたもやもやが一気に逆戻りしてくる。

こんなにも、簡単に決意が壊れるなんて。

俺もまだまだなあ…。

ラケットを振る手を止めた俺のところ

ゆっくりと智夏が向ってくる。

俺はまだ振り向いてない。

今なら…まだ大丈夫だよな？

今ならまだ…すっぱり別れてやれるよな？

顔見たらきつと…アウトだな。

「智夏」

「？どうしたの？」

「おめでとじ」

「え？」

智夏のおどろいたような声。

きっと今日の朝、早く来て俺に言っつもりだったんだろう。

先にいえて本当によかったと思う。

面と向って言われたらやばいし…。

なにより、俺はまだ好きだし。

まだ嫌われたくないというのはやっぱり男らしくないだろうか？

でも、そんなこともついででもいい。

今は開放感でいっぱいだ…。

こんなことを言っただけの自分をほめてやりたいくらいだ。

「仲良く…やれよ?」

「え?」

それだけ言った後、俺の側に転がっていたボールを拾い上げる。

もう話さなくて良いように…ありったけの力を込めてサーブを打つ。

「翔太?」

…出来れば、もう名前もよんで欲しくないんだけど。

それは俺のわがままだろう。

だからせめて、

「危ないからコートから出てる」

今だけは俺から離れて欲しい。

せつかくここまでやってきたのに今にもそれが全部壊れそうなんだ。

これ以上ここに智夏がいたら…。

これで、全部終わったんだよな。

じゃあな。俺の初恋。

今日の夜九時に待ってる。

それからという物、

智夏は何度か俺に話かけてきたけど

どれもそっけない返事をした。

呼び方だつて一様気を使って苗字で読んだし。

これだけが俺の精一杯の配慮だった。

あの朝練の日からちようど一週間がたった。

時間はもうすでに放課後。

部活もひとしきり終わってそろそろ学校から生徒がいなくなるころ。

俺もそろそろ帰らなくちゃなあ……。

準備を終えて教室を飛び出す。

夏が近いからといってまだそれでもやっぱり梅雨は梅雨だ。

じめじめと曇っていて日が出ていない。

こりゃ雨降ってきてそつだな。

足を早めて校門へ向う。

しかしそこには今もつとも会いたくなかった人物がいた。

夕日を受けて眩しそうに俺を見る。

「翔太…」

智夏が俺の名前を呼んだ。

顔は悲しそうに俯いている。

大河が一緒じゃないのが救いだ。

でも、最近この二人が一緒に帰ってるどころ見てないような…。

「あのさ…」

智夏が重い沈黙を破る。

でも情けないことに、俺にはまともに話す勇気がない。

おもわずそっけない返事をする。

「悪い、俺もう帰るから」

「ま、待って!!」

「？」

智夏が声を張り上げる。

部活以外では珍しいことだ。

「えっと…今日の夜の九時に…ここに来て？」

待ってるから…」

消え入りそうな声でそう俺に言った後、

智夏は走り去って行ってしまった。

今日の…九時？

はっきり言って行きたくない。

待たれても困るんだけど…。

でも、俺にはすっぱかすことも出来ない。

意味はわかんねーけど、行くしかないのか？

そして結末。

あれから俺は、迷いに迷ったあげく

玄関でこっそりと靴紐を結んでいた。

外に出る準備は万全　　と言っただいだ。

「よし…」

結び終わった俺は、親にばれないように玄関の扉を開けた。

三十分ほど前から部屋にこもると宣言した俺を

親は少しも疑っていない様子だった。

逆にここまで疑われないと罪悪感もあるけど。

今わとりあえず後回し。

俺も俺なりに、それもけじめつけたんだから

智夏が俺を呼び出したっておかしくはない。

そんな理由をつけながら、俺は学校へと向かった。

ちょうど徒歩二十分。

俺の家から学校までにかかる時間だ。

あたりはすっかり暗くなっているけど、今日は満月のせいかな明るい。
不気味になるはずの学校を強く照らしている。

「智夏？」

その月と重なるようにして、智夏は門の前に立っていた。
時間は五分前だからちょうどいいころだろう。

「翔太……」

消え入りそうな智夏の声。

わずかだけど俺の名前を呼んだ。

その声にまだドキツとする俺は末期だ。

いやいや、今はそんなこと言ってる場合じゃないな。

俺のがぐらつと来ちゃつまえに帰らないと…。

「えっと…どうしても翔太と…話がしたくて…」

「大河のこと？」

「…知ってるの？」

俺は無理にでも智夏に冷たく対応する。

どうやら智夏は俺が智夏と大河のことを知らないと思っていたらしい。

そんなわけねえのに。

「でも、今日話じゃなくて…翔太に聞きたいことがあって…」

「何？」

「何であたしのこと避けるの？」

「…は？」

避けてる？俺が？

「そりゃそうだろ、だって俺はもう智夏の彼氏じゃねえんだし。

お前だって気まずいだろ？」

それに新しい彼氏に悪いし」

「だから！」

智夏が急に声を荒立てる。

「なんでそんなことになっちゃったの…?」

「…そんなこと…聞いてえのは俺の方だったの…」

俺だってなんで俺じゃない奴と付き合ったのか聞いてえよ。

聞いても諦められる自身はねえけど。

「あたしのこと…嫌いになったの…?」

「別に…、てかお前はどんな訳?俺のこと嫌い?」

わざと答えられないような質問をする。

この際ならばつきりと言ってくれたほうが俺としてはありがたい。

「……………だよ…?」

「聞こえない」

「あたしは…好き、だよ?翔太のこと…」

「じゃあなんで?」

「え？」

「じゃあなんで大河と付き合ってたの？」

智夏は少しだけ困った顔をする。

「えっと…もしかして体育館のこと？」

「そっだよ…」

少し遅れて俺が答えた途端、智夏の顔が少しだけ緩んだ気がする。

俺の気のせいかな？

「後…さっきの質問なんだけど…あたしのこと…好き？」

…反則だろ。

そんな聞き方されたら本音言っしかねえじゃん。

もちろん俺の答えは…

「好きだけど？」

開き直ったように答える。

当たり前のようにおとずれた沈黙。

でも、その沈黙もわずか数秒で打ち破られた。

なぜなら。

「翔太あゝ…」

「うわあ！」

突然智夏が俺の元へ駆け出し、抱きついてきたからだ。

たちまち俺の顔は赤くなる。

夜だからよかったけどたぶん耳まで真っ赤だろう。

「よかったあ…」

智夏が俺のTシャツに顔をうずめる。

俺は抱きしめ返したかったけど、何とかぎりぎりのところで踏みとどまる。

いやいや…何も分からないまま抱きつかれても困るんですけど…。

俺の熱くなった体温がだんだん平熱に戻ってきた頃、ようやく智夏が顔を上げた。

「えへへ…ごめんね」

と、小さく舌をだして笑う。

泣いてたのか心なしか目が赤い。

「あのさあ…」

「何？」

「俺、全く状況が読めないんですけど？」

「ああ、かつこわりい！」

俺は久しぶりに屋上で大声で叫んだ。

俺と智夏以外に誰も人はいなかったし、てかいても別にどうでもよかった。

「そんなことないって！」

智夏はさっきから俺にそういうけど俺はどうしても納得できない。

だって俺は人生最大の勘違いをしていたのだから。

そう…智夏と大河は付き合ってたんだ。

あの体育館では…

「俺さ好きな奴いるんだけど…」

「知ってるよ。美咲でしょ？」

「っ！？なんで知ってるの！！」

「顔見てればわかるって。」

手伝って欲しいんでしょ？」

「いやあ、そうなんだけど…」

「まだなんかあるの？」

「実は…もう今日一緒に帰る約束してんだ…」

「え！？本当に？」

よくOKしてくれたね。美咲、男子に興味ないのに」

「えっと…それですなぁ…一つだけ条件がありまして」

「あたしが一緒ならいい…とか？」

「大正解！」

「大正解！じゃないわよ！知ってるでしょ！？」

あたしがいつも翔太と一緒に帰ってること!」

「当たり前だろ! だからこうして折り入って頼んでるんだ!」

「そんなこと言われても…!」

「頼む! 俺の付き合ってくれ!」

「うん…! しょうがないなあ。いいよ! 付き合っただげる!」

ってな感じだったらしい。

だから、要するに全部俺の勘違い。

あゝかつこわりい!

それもあげく智夏まで泣かせて…。

またこのシチュエーション？

「あーマジで自分がヤダ…」

もう恥ずいを通り越して、悲しくなってきた。

そんな俺を必死で慰めてくれる智夏が更に悲しい。

「あたしだって悪いもん。」

翔太のせいじゃないよ？」

…とは言ってくれるものの。

なんか納得できない。

「ホントに…ごめんな？智夏…」

「良いつてば」

「いや、俺が良くない。」

もう俺のこと煮るなり焼くなりしてくれ！」

俺のおかしな発言に智夏がクスクスと笑う。

「じゃあさ？一つお願いしても良い？」

「おう！なんでも聞く！」

なんか今の俺、忠犬みてえ。

「……………して？」

「え？」

「キスして…？」

ふえ？

智夏が？

こんなこと言うなんて…ありえねえ！

智夏が顔を真っ赤にしている。

俺の聞き間違いじゃないよな？

…なんか俺まで顔赤くなってきた…。

今まで見たことないくらい智夏が可愛い。

俺が智夏の頬に手を添えると目を閉じる。

…やべえ、マジで可愛いんだけど…。

そして顔を近づける。

後、5センチ……だったのに。

「智夏いるー？」

勢いよく開かれた扉から顔を出したのはもちろん智夏の親友。

そんな俺達が真っ先に目に入ったのか。

「…もしかしてお邪魔だった？」

「うん、すげえタイミング悪い」

「ちよ、翔太！」

いや、マジでタイミング悪い…。

智夏からこんなこと言ってくるなんて滅多にないんだぞ？

あーあ…。

「で、どしたの？」

「いや、大河が呼んでたからさ。

ここにいるかなと思って呼びに来たの」

「そっか、ありがとう。

じゃあちよつと行ってくるね？」

ぱたぱたと立ち上がって屋上を出る。

それを屋上から見送る。

屋上は見渡しがいいから空中廊下を通る智夏がよく見える。

「あ！」

「ん？どしたんだ？」

俺と一緒に智夏を見送ってると思ったら急に声を上げた。

「あっちの方向って…体育館だよね？」

「そーだけど…、大河がいるんじゃないのか？」

「違うの…智夏、勘違いしてる！！」

大河は教室にいるの！

「は！？なんで最初にいわねえんだよ！」

「だって普通、最初は教室いくじゃん！」

ん、まあ大河がいなかったら気づくだろ。

「やばいかも…」

「何がだ？」

「前に言わなかったっけ？」

今、体育館不良が多いつて…。

前に大河と言ったときはいなかったみたいだから良いけど…。

今日は智夏一人。

また…このシチュエーションかよ…。

そう考えながらも、さっきまで脱力していた体を一気に起こして屋上を飛び出していた。

お前らだけは。

全力で走ってはいるものの。

智夏は結構足速いし、パタパタと走っていったからそろそろ着いて
いるかもしれない。

やべえ…絶対に間に合わせねえと。

智夏自体には恨まれるような非はないけど、残念ながら俺にはある
んだ。

特定の相手だけど、少なくともテニス部の連中には。

うちのテニス部は強いからまじめにやる奴ばかりだけど、

やっぱり多少は不良みたいな幽霊部員がいる。

そーいうのが許せない俺は何度がケンカを売られたこともある。

まあ、買うことは無いけど。

まさか…いないよな？

よりによってこんな時に…。

一階まで二段抜かしで駆け下りる。

体育館は…あの扉だつ。

少しだけ開いた大きな体育館へと通じる扉は、きつと智夏が開けたんだろう。

「智夏っ…!」

「離してっ!」

「っ!?!」

どこかから智夏の声が聞こえた。

どこからだっ…?」

この広い体育館には無数の倉庫がある。

落ち着け…俺。

体育館の中心部まで来ていったん立ち止まる。

そして耳を澄ます。

わずかな物音のする倉庫がどこかにあるはず。

どこか…。

「翔太ああっ!」

俺を呼ぶ声。

それをちゃんと認識するよりも早く俺の体は動いていた。

体育館の一番奥の倉庫だ。

立ち止まりもせず勢いよく扉を開け放つ。

そこにいたのはやはり男子テニス部の幽霊部員の二人と、

「智夏っ」

部員の一人に手首を掴まれている智夏だった。

一気に怒りがこみ上げて来るのが自分でも分かった。

俺はケンカの経験もないし、しかも相手は二人だし。

走っていたときは何とか智夏の手を引いて逃げれば…なんて考えてたけど。

この三人を見ていたらそれが吹っ飛んでいった。

「タイミングいいじゃねえか」

智夏の手首を掴んでいたほうの部員がパッと手を離して俺を見てニヤつく。

手を離したのを見て俺は智夏につぶやく。

今叫んだらそのまま部員に殴りかかりそうだった。

「…げる」

「え？」

「逃げる、智夏」

「え……………、うん」

智夏は一瞬と惑うような仕草を見せたけど俺を見てしっかりと頷いた。

智夏が倉庫を出てたのを見送った二人は俺に話しかけてくる。

「俺たちに勝てると思ってんのか？」

あざ笑うかのような声に俺は妙にイラついた。

俺は吐き出すように声を出す。

「…思ってたねえよ。」

でも、お前だけは許せねえ」

俺の世界がグラリと揺れた。

本当のこと。

「っ！痛つてえ…」

「う、ごめん。大丈夫？」

保健室。

ケガだらけの俺を智夏が手当てしてくれている。

あの後、少ししてから先生達が俺たちのケンカを止めに来た。

でも、それはもうすでに遅く。

俺もボロボロでキズだらけだし、相手も俺ほどではないけど相当ボロボロだった。

先生達は智夏の話聞いてたみたいで、俺は何とか説教だけで済んだ。

でも不運なことに今日は保健室の先生は不在。

そこで智夏が手当てだけでも、とかってでてくれた。

でも、

「やっぱり痛え…」

「ちょっと待って…もうちょっと…」

手当てをしてきてくれるのはいいんだけど体中ボロボロで痛いし

智夏は案外…不器用だったりするみたいだ。

やっとの思いで手当てを終えた智夏がなみだ目で俺の服のすそをキユッと掴む。

「ごめんね…、時間がかっちゃって」

「別にもう大丈夫って言ってるだろ？」

「このくらい痛くも何とも…」

「…嘘」

智夏が俺の服を掴む力を強くする。

「いつ…！つう…」

その手が傷口に少し触れた。

「すっごく…痛そうだったもん」

「…大丈夫だって」

智夏には見透かされてるみたいだけど素直に痛いと言う気は無い。

いや…ケンカなれしてない俺としてはそりゃもう激痛だけど。

「ごめん…あたしのせいだ」

「んなことねえって。」

俺だって本当は智夏と一緒にすぐ逃げようと思えば逃げられたんだし。

智夏のせいじゃない」

「でも……。」

あたし、最近翔太のこと傷つけてばかりなんだもん」

「傷ついてねえ…わけじゃないけど、

どっちも俺のせいなんだし。

智夏のせいじゃない。

それに、ケガぐらいすぐ直るって!!

つか、そっこーで直す!」

「うん…」

俺がどんなに大丈夫だって言っても納得できない様子の智夏。

俺にとっては智夏に心配かけるくらいなら

ケガだってなんだって平気なつもりだ。

うつむいたまま口を開かない智夏を覗き込むと、

「だから…泣くなって」

必死にこらえていたであろう涙を俺はそっとぬぐう。

「だつてえ〜…」

智夏がかすれた声を出す。

ああーもうー!!

こいつは何にもわかってねえ…。

「俺はお前に泣かれるのが一番困んの!」

「…なんで?」

「なんでってあのなあ…」

智夏の上目遣いにやられて思わず目を反らしながら頭をかく。

「智夏の泣き顔…可愛過ぎ」

俺は言い終わらないうちに智夏を抱きしめた。

出来れば聞こえてないといいなあ…なんて思いながら。

なんだかその時の智夏が可愛くてしょうがなかった。

「翔太…好きだよ」

顔は見えないけど肩越しに聞こえる声。

こいつは全く…どこまで俺を押さえられなくする気なんだよ。

智夏を抱きしめていた手をゆっくりとほどく。

「翔太？」

「…さっきの続き」

そう言っただけ俺は智夏の腰に手を回してぐっと引き寄せる。

返事を聞かないうちに、俺は智夏にキスを落とす。

目を開けると目の前に顔を真っ赤にして恥ずかしている智夏がいた。

今も感じてるこの激痛も。

智夏を失う怖さも。

今は全部忘れて。

智夏をただ、抱きしめていたい。

「俺と、付き合ってください!!」

「ごめんね、あたし彼氏いるから」

何故だか成り行きで大河の告白に付き合うことになってしまった俺。

と、いうより智夏と二人で向かいの教室で見てるだけだけど。

そしてその告白の相手は…。

「なんで林なんだよ…」

そう、大河の好きな相手は智夏の親友の林。

なんでも一目ぼれしたらしい。

分かる、確かに分かる。

林は結構モテるし、男子連中にも人気だ。

だったらなんで智夏と仲良かったんだ？

「あたしと大河は大河が転校してきたときから席も隣だったし。

案内とか教科書見せたりするのもあたしの役目だったから」

ニコニコと二人を眺めながら答える。

「でも実里はダメだよね。」

年上の彼氏いるし、もうすぐ一年目らしいし」

そうか…どつりで大河がバツサリ切られてる訳だ。

すっかり飽きた俺は教室のベランダに座り込む。

それにしても一年目かあ…。

すげえな、それ。

「どしたの？」

座り込んだ俺に視線を合わせて隣に座り込む智夏。

「俺たちって付き合い始めてやっと半年だよな？」

「そ、そーだけど…、どしたの？イキナリ…」

誰にも見られない場所。

俺たちしかいない状況。

絶好のチャンスだろ、これは。

俺はそつと短く智夏にキスをした。

「なっ… / / /」

「俺も一年たつてもお前のこと好きな自信あるから」

すでに真っ赤になつてた智夏が更に顔を赤くする。

嘘なんて言わねえ。

どこまでも続いていけ。

俺の初恋。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4163g/>

初恋スピリッツ 翔太side

2010年10月10日05時09分発行